

抱樸 かわら版 DX



【2022年度報告】

2023
vol.3

もくじ

ごあいさつ	01
沿革	02
希望のまちプロジェクト	03
対談：永井玲衣×奥田知志	06
支援付き住宅に関する全国各地との連携	09
事業紹介	10
相談事業	11
困窮者・ホームレス支援	12
子ども・家族支援	14
高齢福祉	15
居住支援	16
就労支援	18
刑務所出所者等への更生支援	18
障害福祉	19
地域共生社会創造	20
政策提言・周知活動	24
会計報告	25
応援メッセージ	26
サポートのお願い	28
法人賛助会員	28
事業所一覧	29



抱樸の由来

「抱樸」とは、原木・荒木を抱きとめること。

抱樸は原木を抱き合う人々の家。

抱樸を抱く——「抱樸」こそが、

今日の世界が失いつつある「ホーム」を創ることとなる。

ホームを失ったあらゆる人々に今呼びかける。

「ここにホームがある。ここに抱樸がある」

表紙

手塚建築研究所が制作した「希望のまち」の模型

裏表紙

「ふるさと納税で希望のまちを応援」の最終日、東八幡キリスト教会にて開催した「希望のまち チャリティライブ」の様相（2023年1月29日）。音楽家の小林うてなさんと坂口恭平さんが駆けつけ、奥田理事長とのトークも行ないました。

（撮影：八木咲）

あなたが自分をあきらめても、 私たちはあなたのことをあきらめない

2022年度の活動報告をお届けします。

昨年もコロナ禍の影響で仕事を失った、収入が減った、会社の寮を追い出された、あるいは給付金などの手続きをしたが方法がわからないなど、さまざまな相談を受けました。抱樸の活動はこの報告書にある通り多分野におよんでいます。各部署が連携しながら事態に対処する。それが抱樸の強みのひとつです。そして、これらの活動は、皆さまのお支えによって継続できています。心から感謝申し上げます。

しかし2023年に入り、炊き出しに並ぶ人数が増え続けています。7月末の時点で90名（小倉北区の炊き出し会場）。昨年の同時期が60名程度でしたので、1.5倍の増加となっています。ただ、その半数は野宿者ではなく地域に暮らす方々であり、食事、薬、古着などを求めて並ばれています。物価高騰などの影響で生活が苦しい人々が炊き出しを利用されています。

2023年5月をもってコロナ感染症は5類となり、一段落した感があります。町の人出も回復し、外国人観光客も戻ってきました。3年前には暗かった夜の街に人のにぎわいが戻ってきています。あちこちで新しいマンションの建築なども見かけるようになりました。「コロナ終了」。そんな感覚を多くの人が実感しているようです。

一方で炊き出しに並ぶ人は増え続けている。これは社会が二極化している現実を表しています。つまり、コロナが明け、次の段階へ移行できた人と、いまだに苦しい状況から抜け出せない人がおられるということです。

コロナが大変だったとき、「みんなが闇のなかにいる」という思いでした。「もう少し頑張ればコロナは終わる。明けない夜はない」とお互い励まし合いながら耐えていました。そして、たしかにコロナは一段落したのです。多くの人が「闇の終わり」を体験された一方で「私だけ

はまだ闇のなかにいる」と思わざるを得ない状況の人々がおられるわけです。「コロナが終わるまでの辛抱」と自分に言い聞かせ頑張ってきた。世間は「コロナは終わった」と賑わいを取り戻した。だが「自分は取り残されたまま」と思わざるを得ない人は確実におられます。経済的困窮に「取り残されたという孤立感」が加わることは大変危険な状況だと思います。自らの人生をあきらめる人も出てくるかもしれません。「期間限定のはずだった闇」が「無期限の闇」にとって代わるとき、「あきらめるしかない」と思わざるを得ない人がいても不思議ではありません。

ある県がコロナ対策の緊急貸付（最大200万円まで貸付）を受けた8000人に対して訪問調査を行ないました。今年の1月から返済が始まっています。調査の結果、すでに13人が自殺していたことが判明しました。日本の自殺率（人口10万人単位の自殺者数）は17.5人です。上記8000人中13人を10万人で換算すると、自殺率は160人を超えます。貸付金返済だけが自殺要因だとは言えませんが、苦しい状況にある人が増えているのは事実です。

「自分のことをあきらめる」。そんな日が来たとき、「あなたのことはあきらめない」と言ってくれる人の存在こそが「いのちをつなぐ」根拠となります。抱樸はさまざまな問題解決を図りつつ、「あなたをひとりにしない」「あなたをあきらめない」ことを目指します。抱樸は「あなたをあきらめない」。それを言い続ける活動であり続けます。この活動は、皆さまのお支えによって続けることができます。活動へのボランティア参加、ほうぼくサポーター登録やご寄付でのお支えを今後もよろしくお願いいたします。

改めましてご支援を感謝します。

沿革

1988.12 「北九州越冬実行委員会」活動を開始

1990.06 「北九州越冬実行委員会」の事務局体制を整備
「北九州越冬実行委員会」の代表を守谷栄二、事務局長を奥田知志とし、活動を本格化。この年、子どもによる襲撃事件が多発し、小学校や中学校の訪問を始める。

1992.04 居宅支援開始 以後NPO発足まで50人支援

1996.01 小倉での拠点炊出し方式始まる

2000.11 「NPO法人北九州ホームレス支援機構」認証

2001.03 「自立支援住宅事業」開始

2002.07 「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」成立

2004.09 北九州市委託事業として「ホームレス自立支援センター北九州」開所
自立支援機能を拡大化。市内の500名ほどに達したホームレスがこれより減少へ。

2004.12 国税庁より「認定NPO法人」に認定される

2005.04 「自立生活サポートセンター」発足

2007.04 「抱樸館下関」開所（2017年まで）

2007.06 「ホームレス支援全国ネットワーク」発足（代表：奥田知志）

2007.07 北九州市内に餓死者が出る（「おにぎり食べたい」と書き残して餓死した事件）

2007.09 7月の事件を受け、「ホームレス支援の現場から見た北九州における不適正な保護行政に関する抗議と保護適正実施に向けた提言」を北九州市に提出

2008.09 リーマンショックが起こる

2009.02 ホームレス急増を受け、「緊急シェルター抱樸館」開所

2009.10 第1回「ゴーイングホーム・デイ」を開催

2010.05 福岡市に社会福祉法人グリーンコープが「抱樸館福岡」を開所（運営に協力）

2010.07 福岡県より「地域生活定着支援センター」を受託

2011.03 東日本大震災が発生

2011.05 東日本大震災の被災避難者支援として、「絆」プロジェクト北九州・伴走型支援事務所開設（北九州市協働）

2011.10 リーマンショック後の若年困窮者の支援として、「若年者就労支援事業」開始（2015年より就労準備支援事業として制度化）

2013.08 「生笑一座」第1回公演

2013.09 「抱樸館北九州」「デイサービスセンターほうぼく」開所
*高齢者福祉事業を開始

2013.10 「多機能型事業所ほうぼく」開所
*障害福祉サービス

2013.10 「子ども・家族まるごと支援事業」開始

2013.10 社会的就労事業「笑い家」開始 だし巻き玉子の製造（2018年まで）

2014.05 「互助会」発足 自立者互助組織から、地域互助組織へ

2014.07 団体名称を「NPO法人抱樸」とする

2015.04 「生活困窮者自立支援相談事業」を中間市で開始

2016.06 熊本地震が発生（ボランティアを派遣）

2017.09 「見守り支援付き住宅・プラザ抱樸」開始
*サブリースによる「住宅確保支援」と「生活支援付家賃債務保証事業」を開始

2018.05 「ほうぼく第2作業所」（就労継続支援B型）開始

2018.11 「共同生活援助（グループホーム）」開始

2019.08 「更生保護・入り口支援モデル事業」受託

2019.11 「希望のまちプロジェクト」開始

2020.04 新型コロナウイルス感染症の流行により緊急事態宣言が発令

2020.04 コロナ緊急生活支援プロジェクト
*クラウドファンディングにより1億円達成

2021.09 「生きるための包括支援事業」開始（ライフリンクより受託）

2023.04 「重層的支援体制整備事業」開始（北九州市より受託）

希望のまちプロジェクト

わたしがいる あなたがいる なんとかなる



2019年11月からスタートした「希望のまちプロジェクト」。世代や属性を超えたさまざまな人々が「その人らしく生きる」ための「居場所」と「出番」のある「まち」をここから生み出していきたいと願っています。2022年4月から3億円を目標とした寄付キャンペーンがスタート。2022年6月には、予定地にみんなが集う拠点になる「SUBACO（すばこ）」が誕生し、さまざまな活動が行なわれました。第1弾として、2022年6月4日に「にわかプロジェクト」*のオープニングイベントを開催。黒田征太郎さんと谷本仰さんによるセッションで子どもたちも参加して、看板づくりを実施しました。看板はSUBACOの壁面に飾られ、楽しい目印になっています。

*にわかプロジェクトとは

「建築まで予定地が空き地ではもったいない」「建物がオープンするまでに地域と出会う」との思いから、みんなが集える「場所」をつくり、地域の人たちと出会い、1人でも多くの人と仲間になる活動をスタート。運営はボランティアの「きぼうのたまご委員会」。



SUBACOでは、定例での催しも始まりました

◎ にわかカフェ

みんなの居場所になるため、誰でもが参加できる場として毎週火曜日午後無料カフェをオープン。

◎ 「まちの先生」企画

地域にいらっしゃる方に、好きなこと・得意なことを披露し教えてもらう機会。にわかカフェに合わせて月に2回開催。

◎ 地域清掃

月に1回、ボランティアのみんなで地域を清掃しています。道行く方々にお声がけし、まただんだんと声をかけてもいただけるようになってきました。

SUBACOの催しについては、毎月「にわかカレンダー」を地域に配ってお知らせしています。

掲示板にも貼ってます



予定地でのイベントも企画しました。2022年11月23日には、21店がお店を連ねる「にわマルシェ」を開催しました。小雨模様でしたが、292名にご参加いただきました。



夏休みには子どもたちに向けた「シャボン玉を飛ばそう」企画。2023年1月21日には「希望のまち竹あかり」を開催。竹害を竹財に変える地元の取り組み「小倉城竹あかり」で使用された竹灯籠を引き受け、予定地であたたかい灯火を囲みました(約160名が参加)。

DJブースも準備



studio-Lとの協働で行なった「地域ワークショップ」の参加メンバーで「家族のような体験会」を3月12日に開催。さまざまなアイデアを実験的に実施し、約100名が参加しました。

大皿料理や「ながら」会も



みんなでマルシェの準備



SUBACOで初めてのクリスマス会



希望のまちを実現するために



◎プロジェクトの実施体制

希望のまち応援団・寄付者

たくさんの個人および団体の方々から応援・ご支援をいただいています。

希望のまち たまご委員会

予定地のSUBACO（プレハブ）を中心に地域コーディネート

希望のまちプロジェクト推進本部

代表：奥田知志（NPO法人抱樸理事長） コミュニティデザイン：山崎亮（株式会社studio-L代表）
代表：奥田知志（NPO法人抱樸理事長） 顧問：村木厚子（元厚生労働事務次官） 構築会議議長：稲月正（北九州市立大学教授）

プロジェクト事務局（NPO法人抱樸）

希望のまち推進協議会

実行団体：北九州市社会福祉協議会、高齢社会をよくする北九州女性の会、フードバンク北九州ライフアゲイン、子ども食堂ネットワーク、NPO法人抱樸 *2023年3月時点

建築設計監修

手塚貴晴+手塚由比（株式会社手塚建築研究所 代表）

▶進捗報告

2022年7月 「希望のまち推進協議会」発足

2022年10月 グランドプラン（基本計画）発表

2023年9月 「社会福祉法人抱樸」設立

▶▶これからの進行予定

2024年 建築開始

2025年 「希望のまち」まちびらき

◎寄付額の中間報告

建築費用の一部として、目標3億円の寄付キャンペーンが2022年4月からスタート。2023年3月までの1年間で、208,043,511円のご支援を頂戴しました。また、この1年間のうち、2022年11月1日から2023年1月31日までの期間に、ふるさと納税制度を活用した北九州市のガバメントクラウドファンディング（以下、GCF）が実施され、上記の金額にはこのGCFに寄せられた全国からの支援50,964,489円も含まれています。

*寄付キャンペーンは2023年12月末まで延長しております

◎希望のまちへのご寄付について

希望のまちを作るには、皆さまの力が必要です。物価高騰等の影響により、建設事業費は当初想定を上回る13億超になっています。このプロジェクトは、この日本社会を照らすものになると信じています。ぜひ寄付という形でこのプロジェクトにご参加ください。

振込の案内

●ゆうちょ銀行からお振込みの場合

01750-9-173501 特定非営利活動法人抱樸（トクビ）ハウボク

●他行からお振込みの場合

ゆうちょ銀行（9900）一七九（イチナナキュウ）支店 当座 0173501

●クレジットカード

希望のまちの特設サイトよりご寄付いただけます。

希望のまち
▽特設サイト▽



“大丈夫だと思える場”は この社会にあるか？

永井玲衣（哲学研究者）×奥田知志（抱樸理事長）



福岡県北九州市に福祉と共生の拠点となる複合施設をつくる「希望のまちプロジェクト」。その応援団でもある哲学研究者の永井玲衣と理事長・奥田知志が、2023年3月に長崎県で連続トークツアーを開催しました。ここでは、3月24日の長崎市メルカつきまちで実施された対談をお届けします。ピンポンダッシュが許される社会に必要なものとは――。

奥田：永井さんにはYouTube番組「ほうぼくチャンネル」にも出ていただきましたし、何度も一緒にいますが、著書の『水中の哲学者たち』、これもすごくいい本です。

永井：私は普段、哲学対話という場を開く活動を10年くらい続けています。哲学対話とは、簡単にいうとひとつの「問い」のもとに集まった人々と対話をするというもの。私の場合、「この社会に大丈夫だと思える場ってあるのだろうか？」というのが初めの問いでした。大丈夫だと思える場、とは何でしょう。そこには心理的安全性も含まれますが、それだけではない。私は、知志さんがお話ししてくださった「希望のまち」の要素にとっても近いものだと思っています。つながりとか、「助けて」と言えるとか、あるいは「なんとかなる」という言葉で充満しているとか。

私は1991年生まれて思春期には自己責任という言葉が流行っていて、数多く聞いてきたのは「どうせ変わらないよ」とか「そんなもんだよ」という諦めの言葉なんですね。そういう言葉しか聞いてこなかったこの耳が、知志さんの「希望のまちプロジェクト」の話聞いたときに「なんとかなる」ってドーンと言われて、本当にびっくりしちゃったんです（笑）。希望というものとあまりにかけ離れて生きてきたなかで、「希望のまち」って私にとっての生まれて初めての希望なんですね。こういう場が、この社会

に、日本にある。そしてそのことを信じられる。だからこそ私はすごく応援してるんです。

自分の人生に「大丈夫だと思える場」があったかと振り返ってみると、実はあんまりなかったかもしれない。むしろ「どうせそんなもんだよ」と言われ、何か生産性があることをしなきゃいけない、何か正解を言わなきゃいけない、急がなきゃいけないと言われる社会のなかで、すごく傷つきながら生きてきたと思うんです。なので私が開く哲学対話は、そういう場をこの空間、この時間だけでも作ってみようという試みでもあるんです。哲学対話の場では「わからない」と言ってもいいし、急がなくてもいい。議論ではなく、対話ですから。議論は、互いに論破し合ったり、どちらかが勝つとか負けるとか、そういうものが出てくる場ですが、哲学対話はそうではなくて、つながりがある。そして、言葉が生まれる。あなたがいるから、この言葉が生まれている。つまり、他者がいるから私の言葉が生まれるということ、ありありと感じられる場なんです。そういう場を探したいと思って、自分の言葉にならないままにずっとこの10年探し続けてきたんですが、知志さんが試みようとしている「希望のまちプロジェクト」を知って、重なっているなあと思えました。

対話は「聞き合う場」 苦味もあるがそれも「うま味」

奥田：対話は、結論を導き出すための手段ではないんですね。対話そのものを楽しむのがいいし、対話そのものに意味があるのに、多くの人は「それをしてどうなるんですか？」という。ソーシャルワークの世界では傾聴の技術を大事にしますが、あれも対話とは違って、傾聴する人としゃべる人というポジショニングが決まっている。そうするとどちらかが支配的になり、権力の構図が生まれる可能性もあるんですね。対話というのは、そうした権力の構図をどう潰すかという世界なんだと思うんです。永井さんがずっと続けている哲学対話と「希望のまちプロジェクト」に通底しているのは、「解決してなんぼ」の世界じゃないということ。今の世の中って、問題や課題を解決してやっと評価される世界です。でも、困窮者支援の場合もそうですが、正直いうと「解決せんやろ」ということも多々あるんです。

たとえば、20年引きこもっていた人がいて、一生懸命関わって5年かかってやっと家から出ることができて、8年目に再就職ができたとして、普通の観点でみれば成功事例かもしれません。でも就職できたら、就職という新しい困難が始まるだけであって、解決してるかどうかは微妙なんです。僕らの世界も、結局は目先の解決をしているだけのように見えることもある。家がない人には家、仕事のない人には仕事。でも、人生的に見ると解決してないことって多いですね。

永井：対話の場って、「聞き合う場」だと思うんです。傾聴だと聞く側、話す側と固定した役割になってしまいがちですが、対話は聞き合う場なので、互に変容しながら響きあっていくような感じ。言うべきことが決まっていて、まるでトランプゲームをするみたいに勝つための話のカードを切っていく議論とはまったく異なる場です。でも、対話があるからといってすべてを解決できるような、そんな明るい話でもないんです。対話ってしんどい面もある。この対談の前の講演で知志さんが「大変であることと不幸であることは違う」という話をされましたが、それを聞いて目の覚める思いがしました。対話はしんどくて大変なんですけど、私は対話をやって一度も不幸だと思ったことはない。苦味のような苦しみはありますが、でも苦味って五味のひとつなんですよ。だからやっぱり私には必要なんです。

奥田：苦味もうま味、いいですね。

「わからない」と言えるか 「わかって」としているか

奥田：私たちの社会は結論がないと駄目だと思いがちで、その分プロセスや対話をないがしろにしてきたところがある。それは、今までの学問の世界が正しい答えを導くものだったから。元東大全共闘の活動家だった最首悟さんは、学問ではなく「問学（もんがく）」だと言い、「問い続けることに意味があって、答えを見出すことに意味はない」とおっしゃるんですね。人生も同じようなもので、不可解なんです。何が答えなのか全然わからないし、何が解決なのかもわからない。そうすると解決に向かうための議論やアセスメントよりも、横に誰かがいてくれて、対話的關係が継続している方がよっぽどいいんじゃないかと思う。対話、言い方を換えれば「つながる」ということ、そのものに意味があるんじゃないかと思うんです。でもそのつながりって、結構面倒くさいんですけどね。

永井：人が集って考えたり話したりすると、どうしても正解を求めてしまう。「わからない」と言えないまま、大丈夫じゃない方へどんどん加速していっ

てしまう。そうすると教室でも家族でもあるいは組織でも、せっかく一緒にいるのに人とつながれなくなっていくんですね。でもそこに「哲学」とか「問い」を挟むと、一緒につながれるんです。たとえば「大人になるってどういうこと？」という問いが出たとき、大人の定義なんて誰もわからないですよね。そういう問いのもとに人々が集える哲学の機能みたいなものを私はとても信頼していて、哲学対話という形をとっているんです。どうしたら人々がわからなさのままで一緒にいられるか、つながり続けられるかということはずっと試しているんだな、ということが最近ようやくわかってきました。

奥田：わからないことはわからないままに、問いが人と人をつないでいく。僕は対話そのものに意味があるし、つながりそのものに意味があると思っているけど、人間にとって「わかって」とすることや、真理を探究することは必要なことだと思う面もあるんです。何でも問いのままで止めてしまって答えが出なくていいのか、という問いはあります。

永井：それは悩むところですね。哲学対話は、問いを立てて探究していくんですが、「みんな人それぞれだよ、それぞれでいいんだよ」では終わらないようにしています。「人それぞれ」って、自己責任とも手をつないでいる言葉でもあって、「あなたはあなたでご勝手に」ということにもつながりやすい。知志さんも夜回りなどを通していろんな方と関わられるなかで、相手が「自分はこうなんだ」と言ったときに「ああ、そうですか」では終わらないですよね。

奥田：終わりませんね。

永井：そこで終わらず、知志さんのやり方で関わられると思います。哲学対話の場でも、「あなたはあなたでご勝手に、私は私で好きにします」で終わらず、それぞれの人がそれぞれの尺度で「大丈夫だと思える場」をどうやってつくっていきけるかを考えます。今後はそれを哲学対話の場だけでなく、この社会のなかで試みたいと思っています。

みんなで問いをしょって ただ一緒に考える

奥田：よく「共感」が大事だと言われますが、正直現場で30何年やってきて、共感って本当に難しい。もっと言えば、無理なんじゃないかと思うんです。たとえば野宿のおじさんからいろんな話を聞いて、「大変でしたね、しんどかったね、わかるよ」みたいなことを言ったら、「お前に俺の何がわかるってんだ！」って10人にひとりはブチ切れるわけです。そういうときに「わからない」とちゃんと伝えるかどうか。簡単に共感できないことを前提にどうするか。僕はね、共感というより連想ぐらいで止めておくほうがいいんじゃないかと思うんですね。

もうひとつは、主語なき会話が問題なんじゃないかということ。英語でもドイツ語でも、必ず主語が入りますよね。でも日本語は主語を曖昧にしやすい。対話が成立するひとつの条件として、「私は」と主語を入れることが大事だと思うんです。たとえば「死にたい」という人に、「死んじやいけない」とか「いのちが大事」と言っても通じないんですね。私が必ず言うのは、「僕は死んでほしくない。僕が嫌なんだ」ということ。もっと言うと「こんだけ1時間も2時間もしゃべった後で死んだりされたら、俺も明日から生きていけないわ、お前責任とれよ」みたいな。こうした主体的な言葉のやり取りや対話ができなくなっていることが、永井さんのおっしゃる「大丈夫じゃない社会」の要因のひとつかもしれませんね。

永井：一方で「私はこう思う」がひたすら分散していると、ただのモノローグの集合になってしまうんですね。でもある対話の場に参加した方が、「自分は答えがほしかったんじゃないかって、ただ一緒に考えてほしかったんだということがわかった」とおっしゃったんです。人って一緒に考えたい

んですよね。すぐに答えがほしい、誰かに解決してほしい、と望みながらも、それでは満たされないことも何となくわかっている。哲学対話の場では、みんなで問いを一緒にしよって、ただ一緒に考える。「私はこう思う。あなたは？」と問う。「あなたはどうしたいの？ あなたはどう思うの？」と問われること自体がとても重要なんだと思います。

奥田：問い・問われるというのは、向き合ってくれているということですからね。僕らは小さい頃からずっと「正解はひとつ」という世界で育ってきました。テストには必ず答えがあって、そこにたどり着いたらマルで、たどり着けなかったらベケ。でも子ども時代が終わって大人の世界に入ると、世の中どこを探しても「ひとつの答え」というのはない。そこに絶望を感じるか、逆にそこが面白いと言えるか。希望のまちプロジェクトでも「なんとかなる、ってどうなるの？」とよく聞かれるんですが、「さあ？」と言ってるんですよね（笑）。でも「なんとかなる」と言えるためには、「私がある あなたがいる」という前提が必要なんです。「私がある」「あなたがいる」。だから「なんとかなる」という三つ目の言葉が出てくる。そこがいいと思っています。

わたしがいる あなたがいる なんとかなる（知らんけど?）

永井：「なんとかなる。って知らんけど?」みたいな感覚、いいですね（笑）。私はある大学生が言った言葉が忘れられないんです。「社会には正解がないっていうのはわかった。もう飽き飽きするぐらい聞いた。でも正解はないけど、間違いがあるじゃん」って。正解がない社会にもかかわらず、何かを言えば「それはおかしい」とか「間違ってる」とか糾弾される。そういう社会じゃん、って言うんです。「なんとかなる」なんて誰も言わない。大人は「助けて」と言わない。希望のまちプロジェクトで私が大好きなのは、希望のまち自体が「助けて」と言ってるところ。お金が足りません、助けてくださいって。「一緒に悩んでほしい、助けて」と言い合える。そういうのが私は嬉しいと思っています。

奥田：希望のまちは、困ったときには「助けて」と言えて、同時に「助けて」と言われる、「助けて」が飛び交う人のまち。実は僕もね、スッキリ解決することを最初の頃は目指していました。でも、人間って解決しないんですよね、私自身も含めて。なので僕の場合は、「助けて」というよりも、みんなでワイワイ「ごまかしてる」という方が合っているかも。

たとえば、ある勉強会で出た課題なんだけど、精神疾患があってピンポンダッシュをする人がいて、地域住民が困っていると。みんながどうすればその人がピンポンダッシュしないようになるかを考えるなか、僕は「ピンポンダッシュをしてもいいという家を30軒探す」と答えたんです。もしピンポンダッシュをしてもいい家が30軒あったら、1日に3回ピンポンダッシュしても10日に1回やられるだけ。1日1回なら1か月に1回しかやられないでしょ。僕の助け方、ごまかし作戦ってこんな感じなんです。ひとりで抱えこむとどうしても辛いから、周りを巻き込んで分散させていく。10日に1回ならなんとかなる、20日に1回だったらなんとかなる、って言える社会。「なんとかなる。知らんけど」。さっき永井さんが言ってくれたけど、本当にそういう感じ。「わたしがいる あなたがいる なんとかなる（知らんけど?）」にアップデートしようかな（笑）。

永井：私は臆病で、何かに対してまっすぐ解決を目指そうとか、目と目を合わせて膝つき合わせて話そうみたいなことがとても苦手なんです。でも哲学対話のなかで「問い」をあいだに挟むと、みんな「問い」のほうに目がいくから集まれる。そこに置かれた「問い」の前ではみんな対等になれるんです。見栄を張らなくてもいいし。あいだに挟む



ものは、「問い」じゃなくても、たとえば一緒に詩をつくるとかでもいいんです。解決や正解を目指すためではないけれど、一緒にいるための「何か」があいだに挟まるといいのかな、と思います。

奥田：希望のまちってどういうまちですか、と問われたら、「わからない」と言えるまち」とも「問いを問いとして共有できるまち」とも「対話ができるまち」とも言える。そこには誰かが誰かを支配するための話し合いもなければ、ひとつの答えを見出していくような議論もない。対話というのは、非常にフェアで、互いを尊重していく営みと言えるし、私のなかではそれが希望のまちの姿と重なっていくように感じています。

永井玲衣×奥田知志対談

*2021/09/27に「ほうぼくチャンネル」でライブ配信した奥田理事長と永井玲衣さんの対談「弱さとは何か?」は、現在までに33,000回以上ご視聴頂いています。あわせて御覧ください。

*写真は2022年4月4日の東京でのキックオフイベントの様です。

撮影：JUN YOKOYAMA
構成：重岡美千代 (NOah.b, Ltd)



永井玲衣（ながい・れい）

学校・企業・寺社・美術館・自治体などで哲学対話を幅広く行っている。D2021メンバー。著書に「水中の哲学者たち」（晶文社）。連載に「世界の適切な保存」（群像）「おそべるてつがく」（OHTABOOKSTAND）「問いはかくれている」（青春と読書）「むずかしい対話」（東洋館出版）など。詩と植物園と念入りな散歩が好き



奥田知志（おくだ・ともし）

抱樸理事長。1963年滋賀県生まれ。学生時代からホームレス支援に携わる。NHKのドキュメンタリー番組「プロフェッショナル仕事の流儀」に2度取り上げられ、著作に「逃げおくれた」伴走者」など多数

支援付き住宅に関する全国各地との連携



新型コロナウイルスが全国、全世界で猛威を振るっていた2020年、仕事と住まいを失う方を支えるため、2020年4月よりクラウドファンディングを実施。1万人を超える方から約1億1,500万円のご寄付を頂戴しました。そのうちの8,000万円を全国10か所での支援付き住宅事業のために拠出しました。これからの日本には、コロナ禍に限らず不安定な状況で生活せざるを得ない方がいるという現実に対し、支援付き住宅の意義は重要だと考えました。抱樸に集まった善意を全国各地に届けるため、抱樸を含む全国10か所10団体と協議の場を持ち、これからの日本社会にとって必要な取り組みを検討し、発信しました。さらに2022年度は新たに3つの地域を加え、協議・検討を進めました。

◎支援付き住宅（サブリース）



生活に困窮した方の全般的な相談にのっています。ご本人からだけでなく、弁護士や警察、病院、一般の市民の方からも「〇〇さんの相談にのってほしい」と依頼があります。また、ホームレス状態の人にこちらから出向き相談を行なうアウトリーチ型の相談事業も行っています。

また、ホームレス状態の人にこちらから出向き相談を行なうアウトリーチ型の相談事業も行っています。

2020年～2022年度までの実績

全国10か所で支援付き住宅を展開。2022年度は、独立行政法人福祉医療機構の助成金を活用し、新たに3団体への資金提供を行いました。これにより、全国13か所での支援付き住宅の取り組みとなりました。

◎支援付き住宅に関する協議 および情報発信・研修会

全国各地での日常の支援は大切であり、さらには、それを社会に還元・発信することも重要と考えています。支援付き住宅事業とともに取り組むパートナー団体と研究者で「これからのあるべき住まい支援」に関して協議する場を持ちました。厚生労働省、国土交通省もオブザーバーとして参加しました。そのうえで、得られた知見、また全国各地の実践から生まれた創意工夫を持ち寄り研さんするため、シンポジウムや研修会を行ないました。



物件確保個数：193戸 利用者数：294名

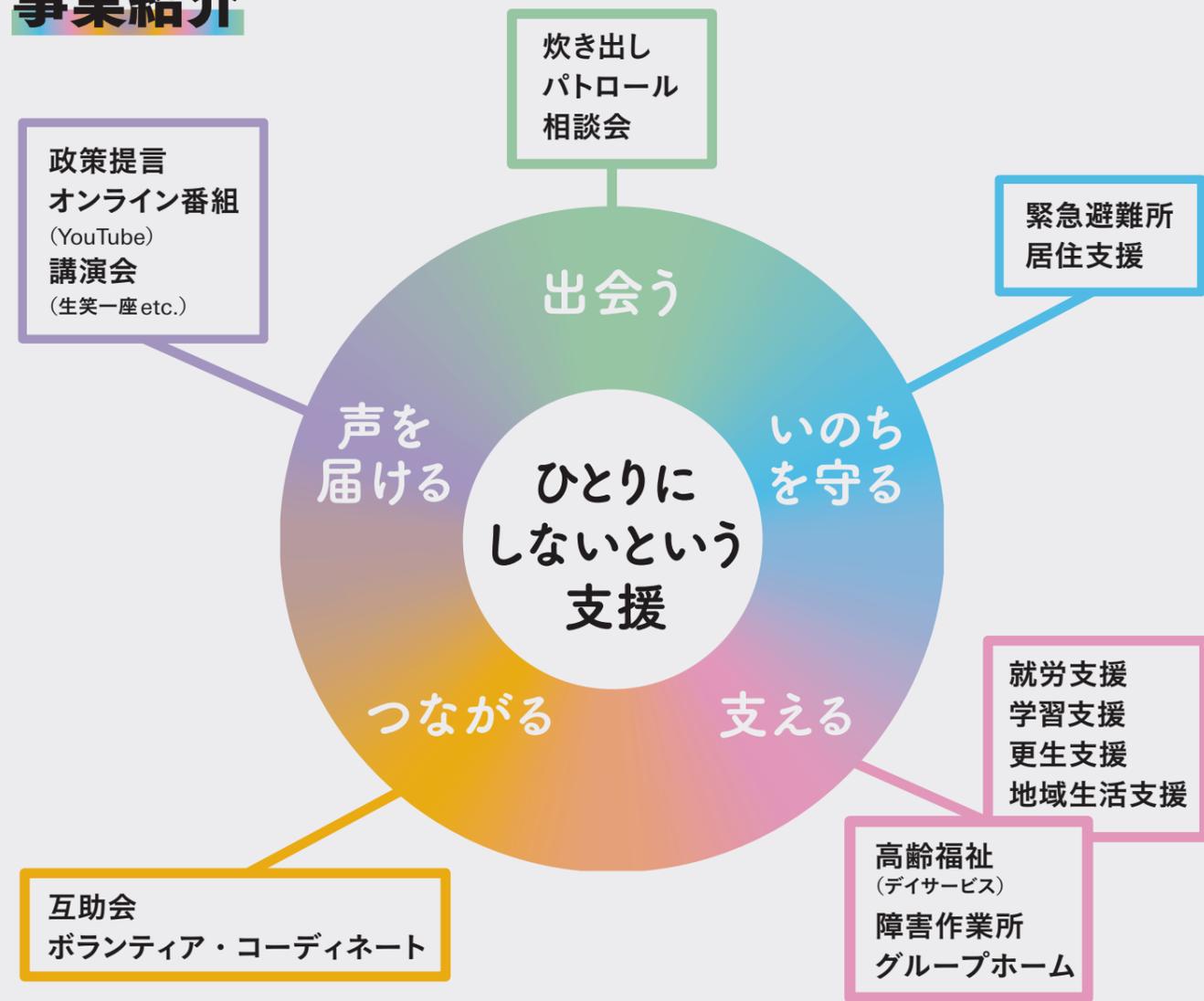
	パートナー法人	エリア	物件確保戸数	物件タイプ	利用者数
1	NPO 法人コミュニティーワーク研究実践センター	北海道	10	分散型	9
2	NPO 法人ワンファミリー仙台	宮城	19	分散型	34
3	NPO 法人ガンバの会	千葉	13	分散型	15
4	NPO 法人サマリア	埼玉	22	分散型・一棟型（15）	46
5	NPO 法人自立生活サポートセンター・もやい	東京	5	分散型	26
6	NPO 法人わっぱの会	愛知	18	一棟型（18）	23
7	NPO 法人釜ヶ崎支援機構	大阪	22	分散型	36
8	一般社団法人近畿パーソナルサポート協会	兵庫	29	分散型	36
9	NPO 法人岡山ホームレス支援ぎずな	岡山	20	一棟型（20）	22
10	NPO 法人抱樸	福岡	25	一棟型（25）	38
11	NPO 法人あきた結びネット	秋田	3	分散型	3
12	NPO 法人知多地域権利擁護支援センター	愛知	3	分散型	1
13	NPO 法人ファミリーサポート愛さん会	沖縄	4	分散型	5
			193		294

【研修会開催実績】

2022年9月13日「空き家活用型の支援付サブリース住宅拡充と事業持続性を確保する事業」合同研修会・シンポジウム

2023年3月17日「空き家活用型の支援付サブリース住宅拡充と事業持続性を確保する事業」第2回合同研修会・シンポジウム

事業紹介



数字でわかる抱樸



相談事業



生活のお困りごとや心配など、まずはお話をお聞きします

ひとりで悩んでいてもなかなか先が見えない。そのようなときに相談できる場所があれば、次に進む勇気が持てたり、自身の気づかなかった可能性が見えてくることがあります。誰かに話を聞いてもらうだけでも違うものです。相談に来る方のお話やお気持ちを聞きながら、複雑に絡み合った困りごとを紐解き、今後のことを一緒に考えます。

◎ホームレス自立支援センター北九州

・巡回相談（北九州市委託事業）

生活に困窮した方の全般的な相談にのっています。ご本人からだけでなく、弁護士や警察、病院、一般の市民の方からも「〇〇さんの相談にのってほしい」と依頼があります。また、ホームレス状態の人にこちらから出向き相談を行なうアウトリーチ型の相談事業も行っています。



・火曜相談会

ホームレス状態の方向けに、毎週火曜日に開催している相談会。決まった時間・決まった場所に相談できる先があることで助かる人が大勢います。

*2022年度：相談件数 209件

・法律相談会

ホームレス・困窮者支援に協力していただける弁護士・司法書士・社会保険労務士のグループ「法律家の会」メンバーが、毎月1回の法律相談会を開催しています。

◎中間市市民生活相談センター

生活に困っている方の相談事業として、中間市からの委託事業「市民生活相談センター」の運営を行っています。

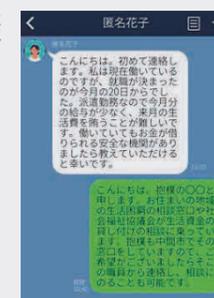
*2022年度：相談件数 223件

◎生きるための包括支援事業・つなぎ支援（ライフリンク委託事業）

2021年度から開始した自殺対策事業です。自殺を考えている人のお話を聞き、切迫性や緊急度が高い方に対して、継続的な架電や必要な場合は福祉的資源につなぐといった支援を行なっています。

◎LINE相談

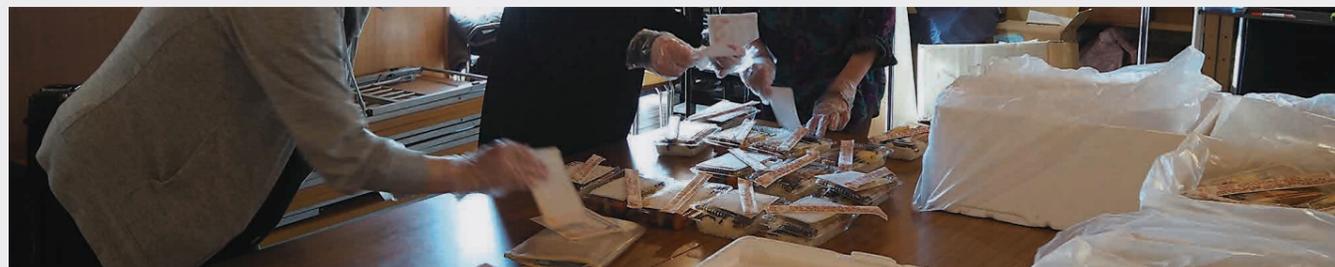
生活の相談は、お電話やメールだけでなく、LINEでの相談も受け付けています。



コラム1 ホームレスとハウスレスは違う

私たちは「ホームレス（社会的孤立）」と「ハウスレス（経済的困窮）」は異なる状況だと考えています。「この人には何が必要か?」と「この人には誰が必要か?」の両面を考えます。以前、中学生から襲撃を受けていたホームレスの方がこんなことを言っていました。「あの中学生は、家（ハウス）はあっても居場所（ホーム）、心配してくれる人がいない。心配してくれる人がいない者の気持ちは、俺は（ホームレスだから）わかるなあ」。その言葉で、私たちはハウスレスとホームレスは違う、ホームレスは路上生活者に限らないことに気づかされました。

▶ 困窮者・ホームレス支援



自立が孤立に終わらないために

社会に居場所がない。困っているのに、「助けて」と言える誰かがいない。生きることに疲れ果て、自分が困っていることにさえ気づけない。私たちの周りには見えるところにも、そして見えないところにも多くの孤立と困窮があります。

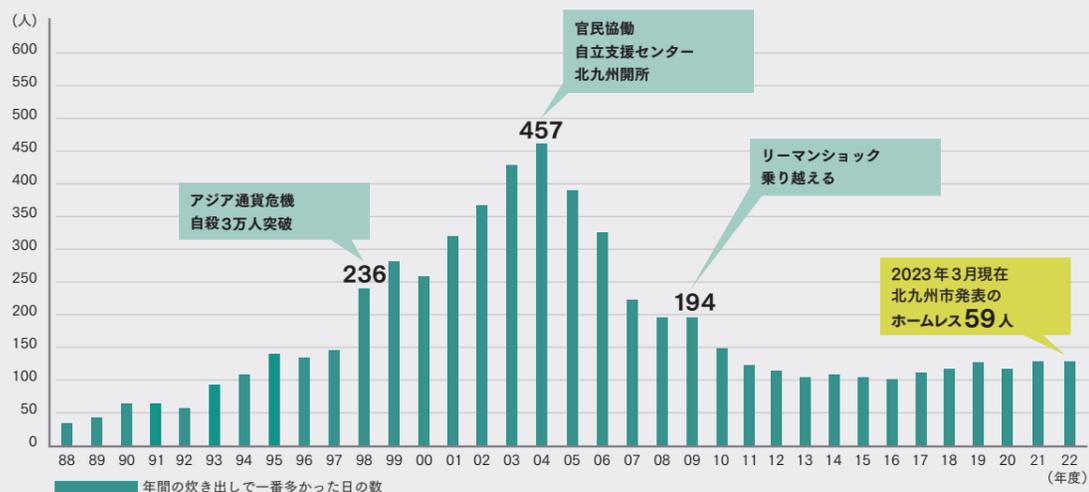
抱樸は社会から「自己責任」と言われ疎外されてしまった方々に寄り添い、次のステップへ進むための伴走を行なっています。それは、本人や家族ばかりに責任を求める社会の風潮のなかで、赤の他人も含めて「助けて」と言える社会をつくるための活動です。

●炊き出し・パトロール

北九州市小倉北区の勝山公園で、年間30数回の炊き出しをしています。炊き出しの後は、北九州市内・下関の7方面に分かれて、炊き出し会場に来られなかった方を訪ねるパトロールを行なっています。お渡しするお弁当は、炊き出し協力団体(※)のボランティアの皆様が準備したもので、お配りする衣類は全国から寄付で集まったものです。炊き出しはいのちを守る活動であり、「これからの相談」につながる出会いの場でもあります。

※炊き出し協力団体：カトリック黒崎教会、カトリック小倉教会、カトリック天神町教会、カトリック戸畑教会、カトリック水巻教会、カトリック湯川教会、カトリック若松教会、在日大韓基督教会小倉教会、下関グループ、聖小崎ホーム、日本キリスト教団若松浜ノ町教会、日本バプテスト連盟枝光キリスト教会、日本バプテスト連盟小倉バプテスト教会、日本バプテスト連盟東八幡キリスト教会、日本バプテスト連盟若松バプテスト教会、日本キリスト教団東篠崎教会、日本バプテスト連盟シオン山教会、ファミリーホームやまだホーム、立正佼正会小倉教会。

炊き出しで出会った人数の推移



*2022年4月～2023年3月 炊き出し回数32回のべ人数2966名(うち女性238名)平均89.9名/回



市内の社会福祉法人が豚汁を提供してくれています



全国の皆様から寄せられたお手紙をつけたお弁当をお渡します

●ホームレス自立支援センター北九州

主に就職を目指す方の支援施設として、北九州市から「ホームレス自立支援センター北九州」の運営を委託されています。2004年9月にスタートし、これまでに1,000人を超える方が利用。ハローワークとの連携により、多くの方が仕事を見つけて施設を出発していきました。求職だけでなく、自動車免許などの資格取得も支援しています。



●自立支援住宅

2001年、北九州ではじめての自立支援の仕組みが自立支援住宅です。ホームレス状態からそのまま入居できる「家」を準備し、複数のボランティア担当者が伴走しながら、地域への出発を支えます。自立が孤立に終わってはだめだとの思いから、担当者とのつながりは入居者が自立支援住宅を出た後も続き、お見舞いや誕生日のお祝い、そして看取りまで行ないます。

*2001年5月以降のべ216名の方が新しい生活へと出発しました。



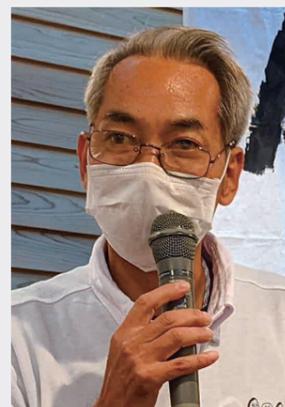
●緊急シェルター抱樸館

路上生活は大変過酷で、いのちに関わります。路上生活をする方が減少している現在でも、年に数名は路上で逝去、または緊急搬送先の病院で治療が間に合わず亡くなるという現実がこの日本にあります。わたしたちは北九州市内にシェルターを準備し、緊急避難のための場所を確保しています。



正会員の声

梅田孝さん (互助会運営委員会・なかまの会の世話人)



抱樸と出会ったのは2014年11月の終わり。仕事が見つからず、家も失って3か月ぐらい野宿していた。冬が近づくとお金もなくなり、途方に暮れて小倉駅のバスターミナルにいた夜、炊き出しボランティアの人に声をかけられました。半年間、抱樸館北九州の自立支援住宅で生活するあいだにいろんなつながりができ、世話人を引き受けることになった。実際やってみると煩わしいこともあるけれど、楽しいこともある。互助会の活動では、毎月高齢のひとり暮らしの会員に電話をかけてます。最初はぎこちなかったけど、今は友だちのように話してくれる。あの夜、抱樸と出合わなければどうなっていたかと思う。もう一回頑張ろうという気持ちになった。透析していて全部の活動に参加できるわけじゃないけど、これからも自分のできることを続けたい。

▶ 子ども・家族支援



子どもの困窮は「家族の困窮」

相談を受けるなかで、「幼少期に学校に行けなかった」「昔から家に居場所がなかった」という話をよく聞きます。子供時代の経験は、その後の人生を大きく左右するものです。しかし、「子どもの貧困」が7人に1人ともいわれ、貧困が親から子に連鎖している現在の状況では、親の責任を求めたところで問題は解決しません。

抱樸はこの困窮の連鎖を断ち切るため、2013年から子どものいる困窮世帯や社会的孤立状態にある世帯の支援事業を行っています。子どもへの学習支援を中心にしながら、その家族に対しても包括的かつ持続的な支援をしています。

学習支援

◎集合型学習「スイトレ」

2013年から、子どもたちへの学習支援をスタートさせました。学校や家庭の環境といったさまざまな事情により勉強したくてもできない状況に置かれてしまう子どもたちの学習支援を無料で行なっています。集合型の学習支援「スイトレ」では、大学生や社会人のボランティアにも協力してもらいながら、宿題や受験勉強のお手伝いをしています。このスイトレは、多くの子どもたちにとって親や家族以外の大人と話せる場所、安心できる放課後の居場所にもなっています。



◎訪問型学習支援

さまざまな事情から集合型の学習支援に出てこれないような子どもたちには、家庭訪問による学習支援も行なっています。訪問を続けていると、子どもだけでなく親との関係も作られていくので、家庭全体の生活支援につながることも多々あります。ママやパパから医療や体調、生活、学校、お仕事や医療、介護の悩みなどを聞き、私たちにできることはないか、一緒に考えます。なかには、引っ越しのお手伝いをすることもありました。

◎社会参加

子ども時代から色々な人や物事に触れることで、人生の選択肢が広がるのではないかと。子ども時代に「誰かから大切にされた」という経験を持つことで、自分のことを大切に思い、そして誰かのことも大切に思える人になるのではないかと。そのようなことを考えながら、私たちは子どもたちが家庭や学校だけではない「社会」に触れるためのプログラムやレクリエーションも行なっています。一緒に釣りや海水浴に行ってみたり、クリスマスや夏祭りなど季節のイベントを行ったりもしています。



◎よるかふえ

安心できる居場所として「よるかふえ」を運営しています。写真は、生まれてから一度も誕生会をしてもらったことがない高校生のために、同学年の子の発案で開催した初めての誕生会。一方、勉強している子もいる雑居っぷり。これが、居場所「よるかふえ」です。

*コロナ感染防止対策で、2022年度は休止中



◎その他の生活支援

私たちの支援は学習だけに限りません。家族と学校との関係のご相談に乗ったり、必要があれば求職や医療、介護的なご相談を受けたり、ただ話を聞いたり。そのようなつながりを持つなかで、子どもも親も幸せを感じられるようにお手伝いします。また、子どもたちが成長しても、そこで支援が終わり、というわけではありません。大人になった彼・彼女らに対し、「困った時にいつでも助けを求められる場所」として残っていくためにも、少ないスタッフ数ではありますが奮闘の日々を送っています。コロナのため、多くの事業が休止となりましたが、小学校・中学校の卒業式にはスタッフが参加。高校合格発表にも付き添い、喜びを共有しました。

*2022年度対象者人数 子ども126名とその家族

▶ 高齢福祉



支援は「出会い」から「看取り」まで

私たちは、出会いから看取りまでの支援をします。住み慣れた地域で安心してその人らしく生活できるように、介護事業も行なっています。

◎デイサービスセンター デイサービスセンター（地域密着型通所介護）を運営し、高齢者の生活支援を行なっています。*2022年度は14名の方が登録され、毎日7～9人の方が通っています。

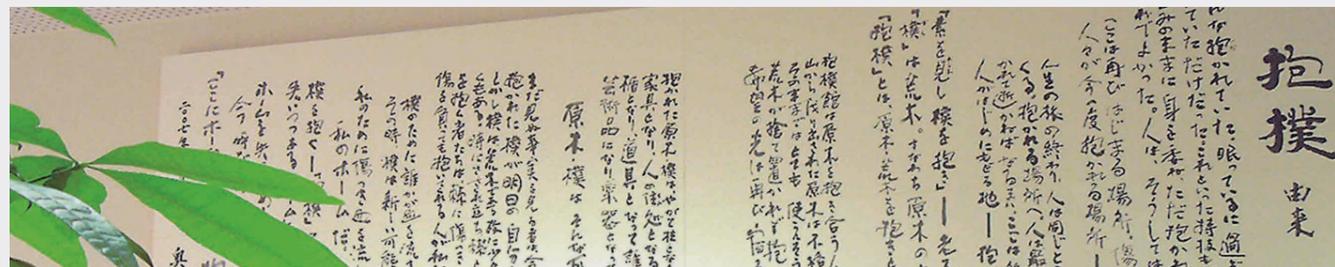
1日の流れ

- 09:00：送迎
- 10:00：利用開始、バイタルチェック、入浴、
アクティビティ、機能訓練（体操など）
- 11:00：嚥下体操（飲み込み訓練）
- 12:00：昼食
- 13:00：アクティビティ（塗り絵、トランプ、誕生日会など）、
機能訓練（体操など）
- 15:00：おやつ
- 15:30：利用終了、送迎



利用者の皆さんが毎月、季節にあわせたテーマで作成している作品

▶ 居住支援



「家」から始まる生活の基盤づくり

住居を失うということは、第一に「生存的危機」、第二に「社会的危機」、そして第三に「孤立の危機」を意味します。住居を失い、路上生活になるという事態はすぐさま生命の危険を意味します。また、あらゆる行政手続は現住所地での手続（申請）となります。住居を失うとすべての社会的手続ができなくなります。さらには、人は一定の場所に暮らすことで地域社会への参加の基礎を築きます。これらの意味で、住居を確保することは何よりも優先される課題（ハウジング・ファースト）であると言えます。

「居住支援」とは、建物（ハコ）を含む総合的概念であり、「子どもを育て、客を招き、社会活動を行ない、生活していくこと」を支えるものです。相談、住宅確保、保証人確保及び社会的手続き支援、生活支援、見守り支援、孤立防止と社会や地域への参加支援、葬儀を含む死後事務など、本人の生活（人生）全般にかかわる支援です。

●抱樸館北九州

「抱樸館北九州」は、多くの方々の寄付によって建てた入居施設です（2013年9月オープン）。路上生活を脱出し自立した人たちのなかには、障害や金銭面などさまざまな生きづらさを抱えるために、どうしても地域生活に馴染めず、施設入所も難しい人たちがいます。そんな方たちを迎える場所が必要でした。

「ここは再びはじまる場所。傷つき、疲れた人々が今一度抱かれる場所」。1階にあるレストランには、「抱樸由来」と題した大きな額が掲げられています。

【施設概要】

- ・1階 レストラン、デイサービスセンター
- ・2～3階 完全個室の居住スペース（30室）、入浴施設
- ・24時間のスタッフ配置

*2022年度 入居者数30名（2023年3月）新入居3名 退去3名
2020年10月1日より、日常生活支援住居施設（※）に認定（北九州市認定）



※ 生活に困っている方向けに家賃を低く抑えた無料低額宿泊施設のうち、面積や耐震・耐火性能など一定基準を満たした施設に対して、行政が生活支援のためのスタッフ人件費を助成する制度が2020年10月1日から始まりました。抱樸は、制度開始当初からこの認定を受けています

●見守り支援付き住宅

（プラザ抱樸 / グループホームほうぼく）

2017年9月からスタートした見守り支援付き住宅（プラザ抱樸）は、単身生活が可能であるものの何かあったときのための見守りや、時として生活支援が必要な方に対して、住まいと生活支援、家賃の保証を組み合わせ「持続可能な居住提供」を実現するモデルです。2021年6月からは20室を「日常生活支援住居施設」（生活保護法に基づく制度事業）として運営を開始したことで、より手厚い支援が可能となりました。

見守り支援付き住宅と日常生活支援住居施設、さらにはグループホーム（共同生活援助）を組み込むことで、支援ニーズに応じた「断らない支援」が可能となっています。

コロナ禍で開催を見合わせていた、プラザ入居者間や地域の方が交流する「サロン」としての活動も今後再開する予定としており、抱樸としての居住支援のあり方をこれからも模索していきます。

【物件内容】

小倉北区（12階建てマンション）全室リフォーム済み、共同玄関オートロック、トイレ・浴室別



*2022年度入居者数 74世帯（2023年3月末）+ グループホーム12名（2023年3月末）

抱樸館入居者の声

井上昌恵さん

いのちネットの紹介で、はじめは抱樸の就労支援を受けていました。持病の1型糖尿病のコントロールが難しく、ひとり暮らしが厳しくなったため、抱樸館に入所することになりました。今は訪問看護さんが週に3回来てくれるので、体調のことをなんでも気軽に相談できて助かっています。最近、抱樸の作業所にも通所をはじめました。ものづくりが好きなので、フェルトで小物をつくったりしています。お客さんに商品の感想をもらったときなどにやりがいを感じます。血糖とうまく付き合いながら、自分らしく安定した生活を送れるようになります。



抱樸館では互助会によるバザーも開催されており、入居者の皆さんにも喜ばれています。

●「自立支援居宅協力者の会」による入居マッチング

不動産事業者がNPOと連携し住居喪失者の居住支援を実施するための組織で、現在、福岡県内約50社の不動産事業者が加入しています。「自立支援居宅協力者の会」の加盟企業が賃貸物件を紹介してくれるおかげで、北九州の活動での住宅確保率は100%！ 会の主な働きとして、①不動産物件の紹介、②入居後の見守り、③家賃滞納などの早期発見とNPOへの連絡、④退去や死去時の残置物処分などに関する協働を行ないます。

●賃貸借契約時の保証人の提供

私たちは「住みたい」と「貸したい」を橋渡しするために、賃貸借契約を結ぶ際に家賃債務保証を提供しています。提供するものは「保証」と「暮らしの安心」です。

さらには、債務保証会社による家賃債務保証と抱樸の生活支援を組み合わせ「断らない家賃保証」サービスの提供も開始しました。ビジネスを組み合わせ、いのちを支えます。

▶ 就労支援



仕事に向かうための土台づくり

私たちは「仕事」全般にかかわる支援に取り組んでいます。「仕事」は、稼ぐ・生きるための手段だけではありません。生きがいや誰かに必要とされることの幸せも、「仕事」のなかにはあります。

◎就労準備支援事業（中間市・北九州市受託）

さまざまな課題を抱え、すぐに仕事をするのが難しい方と一緒に悩み、考え、状況に応じた支援を行なっています。多様な研修や協力企業での就労体験を通して、本人にあった就労を目指します。

*2022年度（北九州市：研修生43名、中間市：研修生3名）

◎技能講習（厚生労働省受託事業）

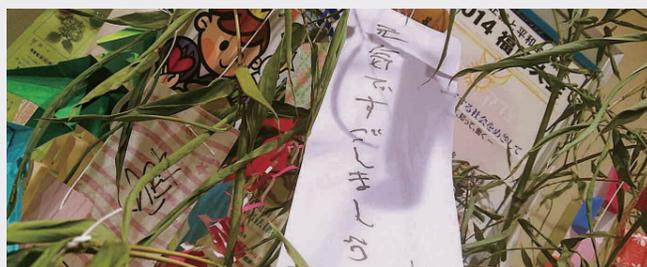
運転免許など免許の取得や技能の習得を支援することで、就職の可能性を広げるお手伝いをしています。

*2022年度：受講数153件

◎無料職業紹介

無料職業紹介事業所の許可を受けて、働き手を求める企業と働きたい人をマッチングさせる支援をしています。

▶ 刑務所出所者等への更生支援



誰もがやりなおせる社会へ

抱樸は刑務所から出所した方への支援も行っています。出所しても家や仕事探しなど、さまざまな面で家族や知人の支援がないと生活の再建は困難です。刑務所にしか居場所がないような孤立した方を生み出さないための支援が必要です。

◎地域生活定着支援センター

高齢・障害などの困難により生活苦に陥り、犯罪に走ってしまう方がいます。たとえば、全国にある48ヶ所の地域生活定着支援センターには、高齢・障害などの課題を抱える方から、年間1,500件を超える支援依頼が来ています。

◎入口支援の取り組み

2021年度から地域生活定着支援センターの業務に、「被疑者等支援業務」が追加されました。刑事司法手続きの入口段階にある被疑者・被告人等のうち、福祉的な支援を必要とする方に対し、釈放後安心して生活できるよう支援をします。

*2022年度：新規相談43名（入口支援）

コラム2

自己責任と出会った責任

現代において「自己責任」という言葉は、「出会った責任を回避する」言葉として使われているように思います。「それはあなた自身の問題だ」と言い切ることで、「その人を助けなくてもよい」と言い放つ社会（「自己責任論社会」）になってしまっているようです。

しかし、私たちはやはり「出会い」には責任があると考えています。「出会い」は時に深刻で、時に豊かな影響を私たちにもたらします。そして、人は一度出会ってしまうと、どれだけ忘れようと思ったとしても、決してそれを「なかったこと」にはできないのです。

もちろん出会いから生じたすべての責任を「とる」ことは私たちにはできません。しかし、出会った責任は「ある」のだから。そう思い続けることで抱樸の活動は35年間続いてきました。

▶ 障害福祉



撮影：高村吉祥丸

生きづらさを抱えても役割のある生活を

抱樸は、就労継続支援B型と生活訓練の事業所を運営しています。

ホームレスや生活困窮状況に陥る方のなかには、さまざまな生きづらさを抱えている方がいます。そのひとつが障害です。生きづらさがあっても役割を見出し、その人らしく生き生きと能力を発揮してもらいたい。障害のある方の仕事づくり、生きがい、居場所づくりのために就労継続支援事業を行なっています。

多機能型事業所ほうぼく（抱樸）：2022年度登録者数 32名（一日平均利用 20名）

ほうぼく第2作業所：2022年度登録者数 32名（平均利用 20名）

【2022年度 作業内容】

- ・高齢者施設やマンションの清掃
- ・ウエス加工
- ・箱折りなどの施設内作業
- ・自主製品やお菓子の製造・販売
- ・自動車部品の研磨・検品
- ・農作業と収穫物を用いた製品づくり



小倉南区の農園を借りて色んな野菜を作っています

ほうぼくストア

<https://npovol.stores.jp>

作業所でつくった「まごころ製品」を通販しています。売上は利用者さんの工賃になります。ぜひご覧ください。



ビーズを使った1点もののチョーカー



手編みのコースター



フェルトボールのしおり



手作りのアクセサリも色々

コラム3 伴走型支援とはなにか？

「伴走型支援」とは、抱樸が提唱する支援のあり方です。これは深刻化する社会的孤立に対応するために、「つながり続ける」ことを目的とした支援として生まれました。その人が直面している経済的困窮や住まい・健康上の課題などを解決する「問題解決型支援」は不可欠です。しかし、問題解決型支援が行き過ぎると、「解決できたか、できないか」という「成果主義」に陥る危険性があります。伴走型支援は「解決」という結果ではなく、「つながり」という状態を重視します。どんな結果になるのであれ、「生きてつながっていること」に最大の価値を見出します。決して「ひとりにしない」こと。それが私たちの支援の根幹にある想いです。

▶ 地域共生社会創造



誰もが互いに助け合える仕組みを

私たちは、支援の専門性を高めると同時に、市民参加型の「社会づくり」を目指しています。地域の隣人としての見守りや助け合いが、「孤立」を生まないための何よりの力になるからです。出会いから看取りまで。「ホーム」を失った方たちとともに生き、支援／被支援の関係性を超え、「お互いさまの社会」を実現させるために、抱樸をプラットフォームにして、たくさんの「出会い」や「交流」の機会をつくりたいと願っています。

●地域生活支援（自立生活サポートセンター）

抱樸での支援を受け、地域での生活を再開した方々の見守りおよび生活全般の支援を行っています。再野宿化や孤立化を防ぐためには、いつでも気軽に相談できる場所が必要です。

支援内容は、病院への付き添いや買い物の同行、引っ越しのお手伝いなど多岐にわたります。

日々の生活で生じる困りごとの相談をお聞きし、必要な機関や人とつなぐだけでなく、共に地域で生活する人間として、互いに尊重しながら支えあう関係を地域に構築することが目標です。



① 就労支援・定着支援

② 住居支援

③ 福祉事務所等との連携による支援

④ 健康・保健支援

⑤ 親族・地域との交流支援

⑥ 福祉制度等活用による支援

⑦ 法律・人権支援その他

⑧ 定期訪問

⑨ 互助会連携

⑩ 看取り等支援

⑪ 金銭管理支援



引っ越しのお手伝い



安否確認訪問



葬儀の支援

*2022年度実績：支援件数のべ17,487件 支援人数のべ6,001名

●ボランティア

抱樸にとって欠かせないのが、ボランティアの存在です。実際に私たちの活動はすべて、ボランティアから始まっています。また、地域共生社会を実現するうえでも、ボランティア活動への参加はとても大切なことだと考えています。

ボランティアで行なう活動は各「委員会」が企画し、活動のコーディネートは抱樸のなかに設置した「ボランティア事務局」が担当しています。（ボランティア活動にご興味のある方は、P25をご覧ください）

●委員会が主導する活動、3つの柱

・炊き出し

2022年度はコロナのため、レイアウトの変更や時間の短縮、食事スペースの撤去、星空カフェの中止などによって「交わりの時間」が減った代わりに、全国から寄せられたメッセージを当事者に手渡しする「炊き出しお手紙作戦」を大きく展開しました。



・自立支援住宅

入居に関する面談、入居式、入居後の日常支援、自立支援プログラム、出発式などを行い、関係性を深めています。

2022年度は、コロナウイルス流行が長期化するなか、料理プログラムと思い出プログラムは開催したものの、食事は見送り、入居式および出発式は食事なしの縮小開催となりました。

・自立後サポート

① お見舞いボランティア

施設や病院におられる方々を定期訪問するボランティア活動。2020年度以降はコロナ影響で活動が止まりましたが、2021年度は対象者の方々へクリスマスカードの寄せ書きも送りました。また、手づくりのお見舞いカードを直接玄関先にお届けに行く活動も行いました。

② カードづくり

バースデイカードとお見舞いカードを毎月つくってます。2022年度はのべ773通を発送しました。

③ なごみカフェ運営

抱樸館北九州のレストランで毎週開催のカフェ運営。コロナの影響でボランティア参加者数が36人でした。2022年度は、11、12、1月のみの開催。計9回開催。

*コロナのため、休止

④ お花を飾ろうプロジェクト

ボランティア講師をお招きして、季節のお花を使ったフラワーアレンジメントを作成し、抱樸館北九州に飾ります。

*コロナのため、休止

⑤ 書き方教室

ボランティア講師に硬筆のさまざまなお手本と筆記用具をご用意いただき、参加者一人ひとりに合ったお手本で、練習・添削をしていただきます。***コロナのため、休止**

⑥ 声かけのための訪問月間

担当ボランティアが抱樸館入居者のもとを訪ねる「一斉訪問」。2022年度はコロナ対策として10月を「訪問月間」と定め、人数を分散して訪ねるかたちを取りました。うちに寄せ書きをしてメッセージと共に「涼」を届けました。

⑦ 冥土の土産（思い出づくり）プロジェクト

身寄りのない方の「行きたい場所がある」「やってみたくいことがある」といった、ご希望を叶えていく企画。



①



②



③



④

◎互助会

月500円の会費で、誰でも参加可能な互助グループです。出発点となったのは、路上から自立した後、再びひとりぼっちにならないように、そして人生の終わりにはみんなで看取り・送りたいと考えた、自立者のみなさんがつくった「なかまの会」です。助けられたり、助けたり——そんなつながりが地域に広がればと、なかまの会を土台に、「互助会」ができました。互助会は「人はひとりでは生きられない」を基本に、3つの精神を大切に活動しています。



- ①「なかま」——仲間をつくる、仲間になる
- ②「お互いさま」——助けられたり助けたり
- ③「ふるさと」——助けて、と言える居場所をつくる

互助会は「共に生きる地域社会の創造」を行なうための事業であり、地域に開かれた大きな家（ホーム）です。誰もが「なかま」。いつでも、どなたでも歓迎します。

※互助会のなかには、野宿の経験を分かち合える当事者グループ「なかまの会」もあります。

【活動内容】

① 互助会レター

行事カレンダーやその月に誕生日がある会員の紹介など、会員交流のための「互助会レター」を毎月発行しています。安否確認もかねて、一人暮らしの方には、なるべく手渡しでお届けしています。遠方の方には郵送でお届けします。



①

② 誕生日会

毎月第3月曜に抱樸館北九州で行ってきましたが、2022年度はコロナ禍のため2023年3月1回のみ開催となりました。延べ40人が参加しました。



④

③ 炊き出しのための衣類物資仕分け作業と地域清掃

毎週金曜日に八幡東区の倉庫に集合して実施しています。
*2022年度：32回実施（1回平均8.0名参加）

④ お祝い金・お見舞金

長寿やご結婚のお祝い、また入院お見舞いも出しています。金額はささやかでも、その方のことをみんなで思います。
*2022年度 卒寿（90歳）4名、米寿（88歳）4名、傘寿（80歳）5名、喜寿（77歳）2名、古希（70歳）7名



⑤

⑤ イベント

なごみカフェをはじめ卓球やカラオケなど週3回の交流行事のほか、季節ごとのレクリエーションとしてお花見やそうめん流し、バスハイクなど盛りだくさんに開いてきましたが、前年度に続き2022年度もほとんどの催しを行うことができませんでした。その中でもなんとか、みんなが集まり、思い出になることはないかと考えに考え、浪曲師玉川奈々福さんを招き、特別公演を企画。70人を超す方々が来場し、迫力ある浪花節の世界をたっぷり味わいました。

⑥ お助け活動

「助けられたり、助けたり」。互助会員が得意なことで、お困りごとのお手伝いする「お助け活動」をやっています。前年度に引き続き、2022年度も70代の刃物研ぎの「プロ」が隔月で、抱樸館北九州でその技を見せてくださいました。



⑥

⑦ 互助会葬

「なかまの会」の会員が亡くなられたとき、互助会のみんなで葬儀を執り行ないます。だれが自分を看取ってくれるのか？「なかまの会」ができた背景には、さまざまな事情で社会的孤立に陥った自立者の切実な思いがありました。「なかまの会」が大切にしてきた葬儀は、互助会で最も大切な活動として受け継がれています。生前をともに過ごしたなかまやボランティアが故人をしのび、思い出を語り合います。葬儀には故人を知らない人も多く参列します。ともに過ごした時がなくても、精一杯生きた人生を、みんなで心に刻みます。2021年度からは、互助会に入っておられない方々のご葬儀に互助会より献花をお届けする取り組みを始めました。

*2022年度 互助会葬：6人をお見送りしました 参列者総数：183名



⑦

⑧ 偲ぶ会

「なかまの会」では年に1度、先立ったなかまを追悼する「偲ぶ会」を開いています。互助会となっても毎年欠かさず、続けています。壇上に懐かしい遺影を並べ、一人ひとりの名前と没年を記した「追悼幕」を掲げます。抱樸が支援にかかわり、亡くなった方で引き取り手のなかった自立者の方々も、一緒に追悼しています。現在、追悼幕には198名近い方々のお名前が記されています。

*2022年度開催 10月6日 参加数：70名



⑧

⑨ お電話作戦

コロナ禍で会えない状況が続くなか、単身独居で介護サービスの利用や抱樸の事務所への定期的な来訪がない75歳以上の会員のみなさんを対象に、月に1度、お電話をかけおしゃべりする活動を始めました。
*2022年度：対象者4月次17人～3月次16人

ボランティアの声

青江美智子さん



抱樸は大学の授業で知りました。就職先が北九州市内になったこともあって、4年生の冬にはじめて炊き出しに参加。行くのはきついなという日もありましたが、続けているうちに参加者の方々と馴染みになり、当事者の方のお名前もわかってお話できるようになりました。炊き出し後のパトロール先に「猫のおじさん」とお呼びしている方がいます。2年前、訪ね始めた頃は口を利いてもらえなかったのですが、いつからか「お前たち、また来たんか。来んでもいいのに」と言葉では拒否しながらも笑顔も見せてくださるようになりました。ボランティアをしていなかったら、出会えていなかったと思います。炊き出しの現場には、“同じ人間”として関わっている温かさがあります。社会人になったばかりの私にとって、ボランティア活動は職場以外の居場所になっていました。転勤で北九州は離れますが、お休みのときにはまた顔を出そうと思います。

▶ 政策提言・周知活動

ホームレスを生まない社会を目指して

私たちは、目の前の方をどう支えるかと共に、ホームレスや孤立の状態にある方を生まない、誰もが生きやすい社会をつくるための活動も行なっています。その一環として、行政への提言活動や広報・周知活動に取り組んでいます。

●政府・行政への提言

抱樸が会う方は、困窮・困難な状況に置かれており、自ら助けを求めることのできなかつた方々です。その人たちに代わり、社会問題やあるべき支援を国や自治体に提言していくことが、出会ったものの責任だと考えています。目の前にいる困っている方への支援と分析・提言により、“ひとりも取り残されない社会”を目指します。

●講演会

「ホームレスを生まない社会の創造」を目指して、困窮の現状を知ってもらうべく全国各地で講演活動を行なっています。ホームレスや生活困窮者、多重債務者、刑務所出所者に対する偏見、誤解は依然として存在します。ひとりも見捨てられることのない社会を実現するために、支援が必要な方の状況や背景を知らせていきます。

いきわらいちざ

●生笑一座

理事長の奥田や副理事長の谷本が、野宿経験のあるメンバーと「人生」について語りながら、ワークショップや歌などを披露する一座です。2013年の結成以来、小中学校を中心に全国で公演を行なってきました。「もう死ぬしかない、と思ったけれど、今、生きていて本当によかった。生きてさえいえば、笑える日が来る」というメンバーの“本当のことば”は、つらい思いを抱えている子どもたちに響いています。

●ほうぼくチャンネル

コロナ禍により対面の講演会の中止が相次いだ2020年、「より広い層に抱樸の理念や活動を知ってもらいたい」と、5月にYouTubeで番組配信〈ほうぼくチャンネル〉を開始。2022年度は、町田そのこさん（作家）、川原尚行さん（認定NPO法人ロシナンテス理事長）、桂大介さん（一般社団法人新しい贈与論 代表理事）、渋谷健さん（コモンズ投信株式会社 取締役会長）らをゲストに招き、25番組をお届けしました。

●情報発信

SNSでも随時情報発信をしています。フォローや拡散のご協力をお願いいたします。



<https://linktr.ee/npo.houboku>



【2022年度の主な提言活動】
 社会保障審議会生活困窮者自立支援及び生活保護部会
 九州厚生局地域共生社会推進会議
 重層的支援体制構築推進人材養成研修・広報啓発事業
 研修企画委員会
 社会資本整備審議会住宅地分科会
 住まい支援の連携強化のための連絡協議会

【2022年度の主な講演会（オンライン開催含む）】
 ・自治体の人権研修会、市民集会
 ・企業の勉強会
 ・イベントトークゲスト
 ・居住支援協議会等での講演
 ・大学での講義

【2022年度受賞】
 第81回西日本文化賞（社会文化部門）
 2023年 令和5年 北九州市表彰（周年表彰）



会計報告

科目	金額（単位：円）	
	2021年度	2022年度
I 経常収益		
受取会費収益	2,891,000	2,934,000
寄付金収益	145,535,367	214,912,639 ①
助成金収益	82,877,470	28,952,294 ②
補助金収益	18,743,224	5,808,926 ③
事業収益等	236,201,407	223,118,411 ④
受託事業収益	275,665,260	307,982,859
雑収益/その他収益	20,672,479	29,700,749
経常収益計	782,586,207	782,586,207
II 経常費用		
1 事業費		
人件費(役員報酬含む)	298,036,858	306,368,495
法定福利費	43,493,948	43,733,808
福利厚生費	541,934	633,468
旅費交通費	9,495,889	15,359,568
消耗品費	20,584,961	19,344,401
通信費	9,015,122	10,349,361
水道光熱費	11,974,282	14,407,759
賃借料	10,098,031	14,544,574
委託費	24,510,390	35,370,307
租税公課	33,071,757	26,275,548
地代家賃	23,572,735	18,365,763
給食費	9,432,400	10,051,325
利用者工賃	6,546,470	6,953,475
業務管理費	14,306,565	18,012,206
講習費	11,736,166	11,941,151
自立支援費	10,881,033	10,736,568
減価償却費	16,038,988	19,334,742
その他経費	42,098,605	44,199,119
事業費計	595,436,134	625,981,638
2 管理費		
(1) 人件費	19,776,080	41,711,339
(2) その他経費	21,018,609	29,230,267
管理費計	40,794,689	70,941,606
経常費用計	636,230,823	696,923,244
当期経常増減額	146,355,384	116,486,634
III 経常外収益	1,397,061	3,655 ⑤
IV 経常外費用		
1 雑損失等	400,401	200,288
税引前当期正味財産増減額	147,352,044	116,290,001
法人税、住民税及び事業税	241,000	241,000
当期正味財産増減額	147,111,044	116,049,001
前期繰越正味財産額	348,095,538	495,206,582
次期繰越正味財産額	495,206,582	611,255,583 ⑥

① 寄付金
 希望のまちプロジェクトのための寄付金等127,039,262円がありました（ふるさと納税分はまだ市の基金となっているため、含まれない）。毎月定額の支援をいただいている「ほうぼくサポーター」は1,500人以上を達成することができました。

② 助成金
 助成金として、支援付き住宅事業のため福祉医療機構から約1981万円、住まい支援のためパブリックリソース財団から345万円、北九州市での子ども支援事業のため赤い羽根福祉基金から約200万円、中間市での子ども支援事業のためパブリックリソース財団から約133万円などが含まれています。

③ 補助金
 補助金として、国土交通省居住支援法人補助金340万円などがありました。

④ 事業収益等
 不動産収益、事業収益、保険料収益、出向者負担金収益の合計です。

⑤ 経常外収益
 経常外収益は、受取利息、固定資産売却益の合計です。

⑥ 次期繰越正味財産額
 次期繰越正味財産額として、約6億円を繰り越しました。内訳は以下の通りです。不動産：3億円（希望のまち予定地倉）社福への譲渡金：2億
 以上のように活用できる流動資産の繰越は約1億円となっています。この繰越金は、炊き出し等のボランティア活動経費や子ども支援事業費など、公的支援のない活動のための資金となります。また、「希望のまちプロジェクト実施」のためにNPO法人抱樸に託してくださった寄付は、社会福祉法人へ譲渡させていただき、「『ひとりにはない』支援」をさらに推進していきます。



青野慶久（サイボウズ株式会社代表取締役社長）

生活困窮を自己責任にすることなく、社会で役割分担して支え合う活動に共感し、サポーターとして抱樸さんの活動を支援させていただいております。これからの社会においては、動きの遅い政治に期待し過ぎることなく、一人ひとりが主体的に行動することが大切だと考えています。みなさまもぜひ！



雨宮処凛（作家／活動家）

自分自身、支援活動をしながらか、本当に自分が困ったときに「助けて」と言えるかと問えば、そのハードルの高さに身がすくむ。だけど、なぜか奥田さんには言える気がして、そういう安心感が、みんなにとっての抱樸なのだと思う。助け合いの実践を、ともに広げていきましょう。



石原海（映像作家／ボランティア）

いままで訪れた場所でいちばんパンチの効いた場所が抱樸の花見でした。花が散ったあとの桜なき緑に囲まれて「花見」と呼ぶその日の熱狂と愛と、そこにいる人々の存在に痺れました。そして、気づいたらアタシは北九州に引っ越していました。抱樸の活動を目撃し続けなければいけないと思ったからです。大好き抱樸、がんばれ抱樸！ これからもずっと関わらせてください。



今井紀明（認定NPO法人D×P 理事長）

孤立はいくつかの安心できる場や所属先を失ったときに起こります。孤立すると社会のセーフティネットへ辿り着くのも難しくなり、深刻な状況に陥ってしまうこともあります。そのようななかでも「希望のまちプロジェクト」は、誰もがつながりをつくることのできる場所を実現していこうとしています。クラウドファンディングのときから、応援しておりました。社会における孤立をなくすためにも、このプロジェクトを応援したいと思います。



コムアイ（アーティスト）

正義と悪を決めて取り締まるようなやり方ではなく、どんな人も、誰ひとりとしてこぼれ落ちないように、やさしく強く、包み込む。日本は包容力のある社会だって自信をもって言える、そういう未来のために、抱樸の挑戦は大切な一歩です。日々のなかでそれを継続されていること、尊敬の眼差しで見つめています。



佐久間庸和（株式会社サンレー代表取締役社長）

抱樸はこれまでの「問題解決型支援」に加えて、つながり続ける「伴走型支援」へと活動の幅を広げてこられました。これはまさに“隣人愛”の実践であり、弊社が経営理念として掲げてきた“人間尊重”にも通じていると思います。今後も有縁社会の実現を目指して、同志として共に歩んでまいりましょう！



杉山春（ルポライター）

「希望のまち」は、たぶん、私たちにいろいろなことを教えてくれるはず。人はこんな風にもともに生きることができるのだと。自分は自分でいいのだと。自分にはこんなに人を助ける力があるのだと。誰でも未来に希望を持っているのだと。生まれてきたことは、本当はとても幸せなことなのだ。そんなまちづくりに参加しませんか？



田口ランディ（作家）

抱樸の活動を見ていると、人間に寄り添い続ける慈悲を感じます。新型コロナウィルスの感染拡大のなかで人と人との繋がりが見直されています。このような社会の転換点に「希望のまち」構想が立ち上がってきたことは必然でしょう。社会的なピンチを、この国の舵取りを福祉に向けるチャンスに変えてくれるこのプロジェクトを、私は心から応援いたします。



玉木幸則（NHK Eテレ バリバラコメンテーター）

最近「だれひとり取り残されない」というようなことをよく耳にしますが、ほんまですか？と聞き返したくなります。今この瞬間にも、生きづらさを感じている人やその生きづらさにも気づかないままで、一生懸命に生きている人がいっぱいおられると思います。抱樸の「希望のまちプロジェクト」が、すこしでも「生きづらさの解消」へつながっていくよう期待しています。だれもがともに生きていくことができる社会にしていけるためにも。



永井玲衣（哲学研究者）

わたしは抱樸のサポーターであることが、とてもうれしいです。それは、この生きづらく、疲れ果てた社会を、抱樸が変えようとしているからです。一人ひとりに丁寧に向き合いながら、壊れた社会の流れに抗おうとしているからです。あなたと一緒に、抱樸を支えたいです。ここからこそ、社会が変わると信じています。



平田オリザ（劇作家）

「文化による社会包摂」は、すべての人にとっての「希望」です。応援しています。



平野啓一郎（小説家）

困難な時代を生きている。私たちは、自分の生活に安心が欲しくて、それを守ることに懸命になる。しかし、一人でできることは限られている。真の安心とは、困難に直面した時、この社会に救済される場所があることである。その優しさを感じられることである。そのためには、まずは今現在、苦境にある人たちに手を差し伸べなければならない。抱樸がその拠点となることを期待しています。



平野健二（株式会社サンキュードラッグ代表取締役社長兼 CEO）

誰か自分以外の人を助けたら、まずは家族のことを思い浮かべるでしょう。その家族が崩壊している家庭があるとしたら、社会は真っ先に手を差し伸べるべきではないでしょうか。格差、貧困、育児放棄……原因はさまざまですが、まずは前に向いて歩みだす人を支えることに、勇気と希望を差し上げたいものです。



藤原辰史（歴史学者）

激しすぎる競争社会にさらされた近代家族には、構成員全員の苦しい状態に安らぎを与えるほどの力はほとんど残されていません。だったら、その家族制度からはみ出ってしまった人たちの居場所や、近代家族を支えるようなもうちょっと緩やかで広い「家族」が必要だと、私は「縁食」という概念を用いて論じてきました。「希望のまち」はまさにそんな試みなので、応援せずにはられないのです。



みたらし加奈（臨床心理士）

命を脅かす「孤独」が訪れたとき、差し伸べられた手を掴むことは難しい。呑み込んでしまった「助けて」や、やっと言葉にできた「助けて」に正面から向き合い続ける姿勢は、生半可な気持ちではできないことではない。抱樸の背中を見ながら、「助けて」と言える社会のために、自分に何ができるのかを問い続けている。そしてこれからも抱樸の活動を応援している。



水野敬也（作家）

希望を感じる人が少ない現代社会で、「希望のまち」は人の心に夢をもたらす大事な灯火だと思っています。一人でも多くの方が、この火に小さな薪をくべ、大きな光にしていけることが、希望に満ちた社会を作るのだと思います。



村木厚子（元厚労事務次官／全国社会福祉協議会会長）

これまで抱樸は、困難を抱えた人々に寄り添い、「私たちがそばにいるよ」と声をかけ続けてきました。抱樸がそうした活動を続けることができたのは、抱樸を応援してくださる応援団がいたからです。コロナで困難を抱える人は増えましたが、抱樸の応援団も大きくなりました。その力を得て、さらにいい仕事をしてください。



茂木健一郎（脳科学者）

誰もが、その場所に追いやられ、その立場になる可能性がある。だから、手を差し延べることは、未来の自分、あるいはそうなったかもしれない自分を助けること。奥田知志さんとは20年以上のお付き合いとなりました。奥田さんの他助と自助の人間どまんなかの伝言に全面共感。

抱樸をサポートするための3つの方法

抱樸の活動は、みなさまのご寄付によって支えられています。

支援を必要としている方々に届けるため、ぜひ財政的なご支援をお願いいたします。

①ほうぼくサポーター：1000円からのご寄付

抱樸の活動は皆さまからのご寄付によって支えられています。そこで、毎月定期的なご寄付をくださる「ほうぼくサポーター」を募集しています。初回のクレジットカード登録で、毎月定額の支援が可能です。(口座振替による登録もできます)。サポーターのみなさんには月1回、活動報告や支援現場の声をお届けする、読み応えのあるメールマガジン『ほうぼくサポーターかわら版』をお送りします。



②都度のご寄付

毎月ではなく、都度のご寄付もありがたくお受けしています。自由金額でのご寄付もクレジットカードの他、ゆうちょ銀行からのお振込みができます。

③遺言による寄付／相続財産からの寄付

わたしたちの活動は、他人同士が会って、知り合って、支え合う「仕組み」をつくる活動です。「財産の一部を社会のために遣ってもらいたい」「遺産を相続したが、一部を寄付したい」—そのような想いを抱樸は受け止め、支援につなげていきます。しんどい状況に陥った人も、再び誰かと微笑み合える、そんな暮らしを、あなたの手で支えていただけないでしょうか。

ほうぼくサポーターやご寄付にご興味がある方は、右記のQRコードまたは抱樸HPをご覧ください。クレジットカード決済のほか、郵便振替でも支援いただけます。「ひとりにしない」社会を一緒につくっていきましょう。

寄付ページ▶
www.houboku.net/webdonation



ご支援を賜っている法人賛助会員のみなさま

(2023年12月1日現在)

一般社団法人 MHC リサーチ&コンサルティング

株式会社 M&M

株式会社 九州エムアイ通信

株式会社 l'mbesideyou

株式会社 サンキュードラッグ

株式会社 サンレー

株式会社 新耕

株式会社 清栄

株式会社 ひまわり

株式会社 フラットアップ

株式会社 松波〈大邱(テグ)食堂〉

株式会社 山猫総合研究所

宗教法人 専念寺

大和証券 株式会社

認定特定非営利活動法人 日本ファンドレイジング協会

ラックユニティ株式会社

* 50音順に記載しています。

抱樸に参加するための3つの方法

①ボランティア

抱樸では、炊き出しやパトロールをはじめとした、さまざまな活動へのボランティアを募集しています。北九州でのお弁当づくり、炊き出し運営、パトロールはもちろん、遠方から支援に参加される方もいます。また、さまざまな事情で学校や塾へ通うのが難しい、小中高校生の子どもたちに、勉強を教える大学生ボランティアも募集中。(NPO 正会員になると、個人情報の守秘義務に誓約のうえ、個人に寄り添う活動にもご参加いただけます)

②「互助会」に入りませんか？

互助会は、誰でも参加可能な会員制の共同体グループです。月500円の会費で、イベントへの特待参加、入院見舞金や長寿のお祝いを受けられ、互助会葬も出すことができます。ここでは、「支援する人／支援される人」という線引きはありません。「おんなじいのち」の取り組みに参加するため、遠方にお住まいの方も多くいらっしゃいます。いつでも、どなたでも歓迎します。

③一緒に働きませんか？

抱樸では一緒に働く仲間を募集しています。フルタイムからパートタイムの仕事まで。ご応募の際はお電話でご連絡のうえ、履歴書をご送付ください。

お問い合わせ先

Tel: 093-653-0779

Fax: 093-653-0779

E-mail: npo@houboku.net

ボランティアや
求人募集については、
右記のQRコード
または
抱樸HPをご覧ください。

抱樸ボランティアページ▶

www.houboku.net/volunteer/



事業所一覧

ほうぼく第2作業所

〒802-0084

福岡県北九州市小倉北区香春口2-6-1-2階

Tel: 093-967-8995

Fax: 093-967-8996

グループホームほうぼく

〒802-0064

福岡県北九州市小倉北区片野4-15-13

ロイヤルプラザ 1階

Tel/Fax: 093-923-0845

日常生活支援住居施設・プラザ抱樸

〒802-0064

福岡県北九州市小倉北区片野4-15-13

ロイヤルプラザ内

Tel: 093-922-8580

中間市市民生活相談センター

〒809-0034

福岡県中間市中間2-10-1

Tel/Fax: 093-246-1030

福岡県地域生活定着支援センター

〒810-0042

福岡県福岡市中央区赤坂1-8-8

福岡西総合庁舎 2階

Tel: 092-406-7895

Fax: 092-406-7896

NPO 法人 抱樸 (代表)

〒805-0015

福岡県北九州市八幡東区荒生田2-1-32

Tel: 093-653-0779

Fax: 093-653-0779

E-mail: npo@houboku.net

ホームレス自立支援センター北九州

〒803-0811

福岡県北九州市小倉北区大門1-6-48

Tel: 093-563-3069

Fax: 093-581-3566

巡回相談 Tel: 093-571-1304

抱樸館北九州

〒805-0027

福岡県北九州市八幡東区東鉄町7-11

(デイサービスセンター抱樸 併設)

Tel: 093-883-7708

Fax: 093-883-7705

多機能型事業所ほうぼく (抱樸)

〒803-0811

福岡県北九州市小倉北区大門1-4-5-2階

Tel/Fax: 093-581-0901

抱樸かわら版DX(デラックス)

2023 vol.3

編集：江田初穂 (抱樸)

谷瀬未紀 (抱樸)

平岩杜悟

デザイン：千原航

発行日：2023年12月1日

発行者：認定NPO法人 抱樸

〒805-0015

福岡県北九州市八幡東区

荒生田2-1-32



2022/2023